



⑤日本インカレでやり投げに挑む松下美咲選手

やり投げをとことん強化、 苦手種目を克服しインカレ優勝 目指すはオリンピック出場

七種競技

女子陸上競技部・松下美咲選手(文4)

女子陸上競技部の松下美咲選手(文4)が、2024年秋の日本インカレ(第93回日本学生陸上競技対校選手権)の女子七種競技で優勝した。前年の日本インカレで2位だった悔しさを胸に、苦手のやり投げを徹底して強化し、ついに学生日本一となった。左ひざのけがや優勝への重圧を感じる中で、最終学年でつかんだ栄冠に「インカレの雰囲気を楽しむつもりで挑みました。本当にうれしい」と笑顔で語っている。

(記事中の写真はすべて、女子陸上競技部OGの服部由美子さん提供)

最終種目の800メートルを走り切るまでわからない^{きんさ}僅差の争い。2位の水谷佳歩選手(中京大)との総合得点の差はわずか12点だった。応援席からの「美咲、おめでとう！」の声で、やっと優勝を確信できた。

勝因を尋ねると、38メートル98を投げて前年より4メートル53も記録を伸ばしたやり投げを挙げた。種目ごとの独自の数式による計算では、前年から87得点を加算した。やり投げの強化が実り、勝利を決定づけたといえる。

七種競技のうち苦手なやり投げ、砲丸投げの克服が、勝利に近づく道と考えていた。2位で悔しい思いをした関東インカレ(2024年5月)の後、やり投げを強化しようと、男

七種競技

1日目が100メートルハードル、走り高跳び、砲丸投げ、200メートルの4種目、2日目は走り幅跳び、やり投げ、800メートルの3種目で競う女子選手の混成種目。英語名はヘプタスロン。独自の数式で各種目を得点化し、総合点を争う。10種目で競う男子の十種競技の勝者が「キング・オブ・アスリート」と呼ばれるのに対し、七種競技の勝者は「クイーン・オブ・アスリート」と称される。



◆ Profile 松下美咲選手

まつした・みさき。兵庫・滝川二高卒、文学部4年。身長162センチ。七種競技の選手の中では小柄。日本インカレは2024年優勝、2023年2位、2022年3位。七種競技の学生記録保持者で卒業生のヘンプヒル恵選手を追いかけ、「強くなりたい」という思いから中大に進学した。尊敬する人は両親。両親と兄が日本インカレ優勝を試合会場で見届けたという。

◎第93回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子七種競技成績 (2024年9月21～22日、川崎市・Uvanceとどろきスタジアム by Fujitsu)

順位	選手名	100mH	走高跳び	砲丸投げ	200m	走幅跳び	やり投げ	800m	総合点
①	松下 美咲(中央大)	13秒67(1026)	1m67(818)	10m38(554)	25秒38(852)	5m34(654)	38m98(648)	2分24秒27(766)	5318点
②	水谷 佳歩(京中大)	13秒85(1000)	1m67(818)	10m64(571)	25秒74(820)	5m23(623)	38m77(644)	2分19秒52(830)	5306点

◎第92回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子七種競技成績 (2023年9月16～17日、埼玉・熊谷スポーツ文化公園陸上競技場)

順位	選手名	100mH	走高跳び	砲丸投げ	200m	走幅跳び	やり投げ	800m	総合点
①	田中 友梨(至学館大)	14秒35(929)	1m55(678)	11m83(650)	25秒95(802)	5m39(668)	49m61(853)	2分20秒93(811)	5391点
②	松下 美咲(中央大)	13秒70(1021)	1m60(736)	10m54(565)	25秒34(856)	5m55(715)	34m45(561)	2分24秒16(768)	5222点

(注) 上位2選手。カッコ内は種目別の点数。記録は日本陸連サイトより抜粋

男子十種競技の日本記録保持者、右代啓祐選手(国士館大准教授)の指導を仰ぎ、夏場に1カ月間、投てき種目が強いことで知られる同大で“武者修行”に臨んだ。

右代選手の作った練習メニューをもとに、やり投げが得意な同大の岡泰我選手(2024年日本インカレ十種競技2位)の動きをつぶさに観察し、岡選手からも、やりを遠くへ飛ばす体の動かし方などをマンツーマンで指導された。

ライバルも驚く記録の伸び

けがをしている左ひざの痛みもあり、夏場は走る練習を控えめにし、やり投げの“特訓”に集中的に取り組み、効果はてきめんだった。体脂肪率は下がり、筋力が3、4%アップした。やりが風に負けない良い軌道を描いて飛ぶようになったという。

日本インカレで前年を大幅に上回る記録を出したとき、ほかの大学の選手たちも「どうしてそんなに(遠くまで)投げられるの?」と驚いたり、記録の伸びを褒めたりしてくれた。やり投げで逆転を狙っていたライバル選手も脱帽するほど、やりは高く弧を描いて飛んでいった。

もう一つ、勝因として、走り幅跳びで踏み切る足を変えたことが挙がる。中学時代から左足で踏み切ってきたが、2024年5月の関東インカレから右足で踏み切るようにした。

理由は左ひざへの負担を軽くするためだ。

練習不足から関東インカレではうまくいかなかったものの、公式戦の初日の走り高跳びを左足、2日目の走り幅跳びを右足で踏み切ることで、「足への負担を考えると、練習を含めてプラス材料」と判断している。踏み切りの変更は、アスリートにとってももちろん一大事であり、「今後、もっとトレーニングが必要」とも話す。

「五輪選手にも負けない」

卒業後も競技は続ける。目標は七種競技でのオリンピック出場だ。走力、跳躍力の向上と、やり投げと砲丸投げの投てき2種目の記録向上のための筋力アップを課題に挙げる。

2024年1～2月は前年に続き、米国サンディエゴに滞在し、七種競技のトップアスリートを多く育成しているクリス・マック・コーチの指導を受けた。その後のパリ五輪に出場した米国代表の選手とも一緒に練習し、並走した中長距離走のタイムで上回ったり、砲丸もより遠くに飛ばせたりして自信がついた。「オリンピック選手にも負けない。自分も目指せる」と背中を押されたという。

「ロス五輪(2028年)もその次も目指して頑張りたい」と将来を見据えている。



Chudai
NEWS

会見に臨んだ選手たち。(左から)大野篤生、小川嵩翔、星野創輝、湯谷杏吏の各選手、アナリストの飯田佳亮さん、牧野虎太郎、加納大、家坂葉光の各選手=2024年12月11日、多摩キャンパス「FOREST GATEWAY CHUO」ホール

「スタメン出場し昇格に貢献」 「自分がどこまで通用するか楽しみ」

サッカー部 今春、卒業生8人がJリーグ、JFLチームに入団、1人はアナリスト

サッカー部の7選手が今春、JリーグとJFLのチームに入団する。部員1人もアナリスト(試合データなどの分析担当者)としてJ3の栃木SCに入社が決まり、8人は多摩キャンパスで2024年12月11日に記者会見し、新天地での抱負や決意、中央大学の4年間で学び、糧としたことなどを語った。

新たなステージで活躍が期待される8人の会見での言葉を紹介します。

(学部・学年の後ろは身長/体重)

★ ^{ようこう}家坂葉光選手(文4) 170 / 70

内定先: ファジアーノ岡山 ポジション: MF

目標は東京ヴェルディ時代の先輩、藤田譲瑠チマ選手。腐らず諦めずにプレーする姿を見てきた。プロの世界は夢見ていた世界なので、内定したときはうれしいし、ホッとしたというのが正直な気持ち。今はプロの舞台でどれだけやれるかが楽しみで、やらないとという強い気持ちを持っている。

中央大学では3年次のシステム変更でウイングバックをやらせてもらい、一気に成長できた。それが今のアピール

ポイントである上下運動と推進力にもつながっているの、そこを見てもらいたい。今後の目標として1番大きいのはA代表。まずはファジアーノ岡山というJ1の舞台で自分の特長を出して活躍したい。それがA代表にもつながると思っている。

★ ^{あつき}大野篤生選手(経済4) 179 / 80

内定先: 沖縄SV ポジション: DF

ピッチ外でのキャラクターが強み。愛される選手になりたい。沖縄SVのSNSに出るので見てほしい! 大学4年間で、自分に負荷をかけすぎて、「サッカーが楽しくない」「早く辞めたい」と思うこともあったが、自分でコントロールできる場所とできない場所を割り切るという、そのあっぱいを学んだ。

目指していた舞台ではないため悔しさはあるが、ここ(会見場)にいるJリーグチームに入るメンバーに早く追いつきたい。高校の同期で現在はJリーグチームのプロ、櫻井辰徳選手からは、プロになる選手の振る舞いというものを感じてきた。希望や夢を忘れない姿など、自分にはない部分は目標としたいが、負けたくもない。いずれは一緒の舞台で、一緒のチームでプレーしたい。目標は、沖縄SVとともにカテゴリーを上げていくこと。現役生活にはリミットを設けて、まずはSVにささげ、死ぬ気でやっていく。



チームのマスコット
やチュー王子を手に
する選手たち

★ ^{しゅうと}小川嵩翔選手 (商4) 167 / 66

内定先：沖縄 SV ポジション：MF

目標は (OB の) 中村憲剛さん。技術はもちろん、チームをまとめていく方法やメンタルなど人間性の部分も見習いたい。これからもサッカーを本気でできる環境を与えてもらい、感謝している。ここまで応援し支えてくれた家族にも感謝し、あとは自分がやるだけ、自分を出して、はい上がりたい。

強みは運動量とキックです。ピッチのどこにでもいる選手になっていきたい。一番の目標は Jリーグの舞台でプレーすることであり、まずは試合に出て勝利に貢献し、目指す舞台へと参入したい。中央大学での 4 年間、プレー面では、ボランチとして守備の意識を高めることができた。ピッチにいる選手で状況を変えていくということを学び、それは今後も強みとしてプレーに生かしていきたい。

★ ^{はる}加納大選手 (商4) 173 / 73

内定先：AC長野パルセイロ ポジション：FW

大学 4 年間で学んだ「うまくいかないときに逃げずに自分と向き合い、自分の闘志を燃やし続けることの大切さ」を今後も生かしたい。今はプロの舞台で戦えることがうれしく、家族やチームメイトに感謝の気持ちでいっぱいです。AC長野パルセイロの練習に参加したとき、選手間の雰囲気が高く、コミュニケーションが取れていて、仲が良いのを感じた。自分自身も受け入れてもらい、すごくやりやすかった印象でした。今後はチームのためにできることをすべてやり、全身全霊、身を粉にしてささげる。その覚悟でいる。目標とする選手は、(元日本代表の) 興梠慎三・元選手です。身長がなくても前線でゴールを量産する技術やプレーに学ぶべきことが多い。特長であるゴールへの姿勢と両足からのシュートを最大限に生かし、自分もゴール、アシストで勝利に貢献したい。まずは一試合でも多くスタメンとして出場したい。そしてチームの昇格に貢献したい。

★ ^{そうき}星野創輝選手 (商4) 184 / 84

内定先：栃木 SC ポジション：FW

自分の夢をかなえられ、サッカーをする姿を見せ続けられることがうれしいです。今までお世話になってきたすべての人たちに感謝しています。この 4 年間で、責任を背負った中での試合でもマイペースな気持ちでプレーすることを学びました。

入団後は、攻撃の起点になってチームを勝たせることができる存在になりたい。見ている人が鳥肌が立つようなプレーができる存在感のある選手になりたいです。目標は、チームが J3 で優勝し、J2 に昇格することです。

★ 牧野虎太郎選手 (経済4) 185 / 80

内定先：AC長野パルセイロ ポジション：GK

歴史のあるチームでプレーできることに感謝しています。内定してたくさんの祝福をいただき、自分が愛されているという自覚と強い責任を感じました。この 4 年間で、試合に関われないときの立ち居振る舞いやチームに与える影響を学びました。

(AC長野パルセイロの) 練習に参加した際は、一人ひとりの高い志と多くの勝利を目指して練習する部分に共感し、このチームに入りたいと感じました。自分の強みのキックを生かして活躍し、勝利のために多方面から貢献できる選手になりたいです。目標は、試合出場と、J3 優勝、J2 昇格です。チームのために自分ができることをしていきたい。

★ ^{あずり}湯谷杏史選手 (経済4) 180 / 75

内定先：ベガルタ仙台 ポジション：MF

今まで関わってきた人たちに感謝しています。内定が決まったときは、とてもうれしかった。プロの世界で戦う厳しさへの覚悟を持つとともに、自分がどれだけプロの世界で通用するのか、楽しみな気持ちがあります。観戦してい

る人を圧倒し、チームを勝たせることができる選手になりたいです。

目標は、多くの試合に出場してチームに貢献し、来年、J1に昇格することです。特に守備に対する意識を今まで以上に強く持ってプレーしていきたいと思っています。

★^{けいすけ}飯田佳亮さん

内定先：栃木SC 担当：アナリスト

プロの舞台でチームの一員として戦えることを誇りに思

います。大学からアナリストに挑戦し、この挑戦を支えてくれた人たちに対する感謝の気持ちを常に持って、これから先も挑んできたいと思っています。この4年間で、準備する力と、それを続ける力を伸ばすことができました。選手を100%サポートするために、120%の準備ができるアナリストになりたいです。目標はJ2復帰のサポートをしていくことです。トレンドや最新技術を学び続け、活用していきたいと思っています。

取材後記

「日々の積み重ねが大事」 チャンスは巡ってくる

学生記者 金岡千聖(商2)

選手たちの前向きな意気込みが強く感じられる会見だった。まず、選手たちは今まで関わってきた人々に感謝し、これからもサッカーを続けられることを喜んでいて、プロの世界でプレーすることを楽しみにしていて、個々の言葉からあふれる“やる気”が印象的だった。

加納樹里部長や宮沢正史監督は、「日々の積み重ねが大事」「どんなときも応援したくなる選手になってほしい」と選手に語りかけ、一生懸命、物事に取り組むことの大切さを強調した。特に、加納部長が言われた「サッカーの神様は見ている」という言葉が印象に残る。長年、選手たちを見続けてきた加納部長は、「どんなときも応援したくなる選手」「全力で挑み続ける選手」にはチャンスが巡ってくると話した。門出を迎えた選手たちは、この言葉

を忘れず、全力のプレーを見せ続けてほしい。

多くの選手がチームのリーグ昇格を目標に挙げていた。その目標のため、多くの試合に出場し、チームに貢献したいという熱い思いが伝わってきた。自身が試合に出場していないときも、自分がチームに与える影響を考えて行動していきたいという牧野虎太郎選手の言葉も印象に残った。

選手たちの言葉から、中大での4年間で、技術面も精神面も大きく成長したことがわかった。その成長が自信にもつながっているのだろう。これからの活躍を楽しみにするとともに、新たなステージでも活躍し、ファンに愛される選手になってほしいと願っている。

取材後記

うれしさと感謝 卒業生の私も夢を追いたい

学生記者 島田莉帆(文4)

会見が始まった瞬間、感じたのはそこにある緊張感と強い思いだった。

選手たちは質問に答えるたびに笑顔が増え、真剣な表情で目標を語り、柔らかい表情で今感じているうれしさや感謝の気持ちを述べていた。私は彼らと同じ大学4年生である。進路に対する不安、決定したときの安堵、そしてこれから進んでいく未来への希望——。歩んでいく道は違えども私自身も感じてきた。

だからこそ、選手たちが口にする今後の目標、自分が選んだ道をまっすぐ見つめる姿勢に強く胸を打たれた。特に印象的だった言葉は、加納大選手の「全身全霊、身を粉にして(チームに)ささげる。その覚悟でいる」という言葉だ。これほど強い言葉ではっきり宣言できるということは、相当な努力をし、強い思いがあるはずである。

この言葉に「私も負けてられないな」と、社会人として自分はどうありたいかを考えるようになった。また、大野篤生選手の「サッカーが楽しくない、早く辞めたいと思うこともあった」と

の発言も印象的であり、大好きだったこと、やりたかったことが嫌になったとき、そこで踏ん張る力とその原因を考えようとする姿に感銘を受けるとともに、自分との向き合い方に共感した。壁にぶつかったときに逃げずに向き合い、自分を客観視して解決への道を考えられる人。そういう人こそが成功するのではないか、と思った。

実は私自身も、小学生の頃から高校卒業までサッカーをしていた。周りには、努力してプロ選手になり夢をかなえた人、かなえられずに苦しんだ人がいた。サッカーの次のステージへと羽ばたく選手、アナリストの皆さんの姿を目にし、ぜひ自分の強みを生かして活躍してほしいと強く思った。

同じ中大卒業生として誇りを持って、私も負けないように自分の夢を追いたい。会見後の写真撮影で見せた彼らの和気あいあいとした表情や無邪気な笑顔は、今後、ピッチで見せてくれる顔とは違うのかもしれない。彼らはどんな表情でどんなプレーをするのか。その姿を見られる日が待ち遠しい。



リーグHのチームに入団するハンドボール部の3選手。左から薦谷日向、高橋侑吾、扇谷蓮の各選手



SVリーグのチームに入団するバレーボール部の4人。左から澤田晶、山崎真裕、柿崎晃、山根大幸の各選手

国内最高峰のステージへ トップリーグ参加の 選手たちが決意と抱負

ハンドボール部、バレーボール部が合同で記者会見

卒業後、トップリーグのチームに進む4年生のハンドボール部3選手、バレーボール部4選手が2024年12月20日、駿河台キャンパスで記者会見し、国内最高峰のステージに挑戦する意気込みや決意、自身のアピールポイントなどを語った。

「学び多かった中大での4年間」 「夢だったトップリーグへの挑戦」

ハンドボール部

実方智監督と、国内最高峰のリーグHのチーム、アルバモス大阪に内定した薦谷日向選手(法4)と高橋侑吾選手(文4)、富山ドリームスに内定の扇谷蓮選手(商4)が報道陣の質問に答えた。



記者会見するハンドボール部の3選手



記者会見に臨むバレーボール部の選手

大阪出身の葛谷選手は、「夢だった大阪でのプレーがかない、うれしい。(アピールポイントは)勝負強さです」と語り、ハンドボール部のメンバーについて「個々のスキルが高く、学ぶことが多かった」と大学4年間を振り返った。

「トップリーグへの挑戦は目標であり、夢だった」と語った高橋選手。2023年発足のアルバモス大阪はリーグ戦下位と厳しい状況だが、「チームは補強にも積極的。まずは(葛谷選手と)2人でプレーオフ進出を目指して、チームを引っ張りたい」と力強く抱負を述べた。

扇谷選手は、「憧れの舞台でプレーするのが楽しみ。主力選手として活躍し、プレーオフに進出したい」と意欲を語り、試合が待ち遠しい様子。中大の4年間は「レベルの高いメンバーから刺激を受け、毎日の練習も充実していた」と振り返り、仲間に感謝していた。

所用でこの日の会見を欠席した泉本心選手(法4)もリーグHのジークスター東京に入団が内定した。

「日本代表、さらに海外での活躍を」 「チームを勝たせられる選手になる」

バレーボール部

最高峰のSVリーグ、ウルフドッグス名古屋に内定した澤田晶選手(総合政策4)は2メートルの長身。「まずはSVリーグで活躍できる選手を目指し、最終的には日本代表、さらに海外での活躍を目標に頑張っていきたい」と話した。

同じウルフドッグス名古屋に内定した山崎真裕選手(総合政策4)は、中学時代に同チームのジュニアチームでプレーした経験があるといい、「クイックやブロック、機動力が強み。チームを勝たせられる選手になりたい」と力強く語った。

2人とも愛知県出身で、会見に同席したウルフドッグス名古屋の佐藤和哉部長も「地元出身の2人に中学時代から注目していた。(ミドルブロッカーという)同じポジションで切磋琢磨してほしい」と、活躍を期待していた。

日本製鉄堺ブレイザーズに進む柿崎晃選手(商4)は「内定をいただき、素直にうれしかった」と笑顔を見せた。器用さや安定したレシーブ、2段トスの精度の高さを自身の強みに挙げ、1年目から試合に出ることを目標に掲げた。

同じ日本製鉄堺ブレイザーズに内定した山根大幸選手(商

4)は、得点の際にチームの雰囲気盛り上げられる点をアピールし、「SVリーグはあこがれの舞台。線が細いので体づくりに励み、恩返ししたい」と未来を見据えた。

同席した日本製鉄堺ブレイザーズの長谷川博之GM兼強化部長は、「柿崎選手にはサーブレシーブの能力の高さ、山根選手はサーブと、コースを幅広く打てるクイックに良さを感じた。SVリーグは厳しい世界と思うが頑張してほしい」と激励した。

会見の結びにイタリア・セリエAに現役選手を派遣するバレーボール部のプロジェクト「THE FUTURES」の説明があり、舩本颯真選手(総合政策2)、土井柊汰選手(文2)、坂本アンディ世風選手(総合政策1)の派遣が発表された。

1部リーグのヴェローナに派遣される坂本選手は、「トップリーグの選手のプレーや考え方に間近に見聞きたい。しっかりコミュニケーションを取りたい」と話していた。

トップリーグに進むハンドボール部、 バレーボール部の4年生たち

●〈ハンドボール部〉

泉本心選手(法学部4年) 185センチ・83キロ
内定先:ジークスター東京 ポジション:レフトバック

つたやひゅうが
葛谷日向選手(法学部4年) 187センチ・85キロ
内定先:アルバモス大阪 ポジション:ライトバック

高橋侑吾選手(文学部4年) 168センチ・65キロ
内定先:アルバモス大阪 ポジション:レフトバック

おぎや
扇谷蓮選手(商学部4年) 183センチ・80キロ
内定先:富山ドリームス ポジション:レフトバック/ライトバック

●〈バレーボール部〉

澤田晶選手(総合政策学部4年) 200センチ・98キロ
内定先:ウルフドッグス名古屋 ポジション:ミドルブロッカー

山崎真裕選手(総合政策学部4年) 194センチ・86キロ
内定先:ウルフドッグス名古屋 ポジション:ミドルブロッカー

柿崎晃選手(商学部4年) 186センチ・75キロ
内定先:日本製鉄堺ブレイザーズ ポジション:アウトサイドヒッター

ひろゆき
山根大幸選手(商学部4年) 191センチ・78キロ
内定先:日本製鉄堺ブレイザーズ ポジション:ミドルブロッカー

取材後記

中大でプレーした誇り チームメイトが陰で支えた記者会見

学生記者 九十歩胡春(文1)

ハンドボール部の実方智監督と選手たちは緊張した表情で会見場に姿を現し、中央大学でのプレーの記憶や学生生活、国内最高峰の「リーグH」でプレーする決意などをそれぞれ語った。会見を通して、実方監督の指導への熱意と、選手たちが中大でプレーできたことを誇りに思っている様子がうかがえた。監督と選手の良い関係性も感じ取ることができた。

リーグHの「アルバモス大阪」に内定した^{つたやひゅうが} 蔦谷日向選手は大阪府出身で、「大阪のチームでプレーすることが夢だった」と話し、大学4年間の成果としてインカレ4連覇を挙げた。同じアルバモス大阪に内定の高橋侑吾選手は「小柄だがスピード、機動力を生かしたプレーが強み」と述べ、高校時代は無名の選手だった自身が中大で成長し、「レベルの高いメンバーと切磋琢磨できた」と感謝の言葉を口にした。

富山ドリームスに内定した^{おぎや} 扇谷蓮選手は、在学中に同チームに短期間移籍した経験が入団の決め手の一つになったといい、富山県出身で、地元のチームでプレーできることを楽しみにしていると語った。

会見で実方監督が、インカレ5連覇を目指すとともに、ハンドボール部の支援を目的に一般社団法人を設立し、寄付金やスポンサーを集めることと、ファンクラブの結成予定もあると発表したことは

驚きだった。ハンドボールの裾野拡大に役立つことを願っている。

一方、バレーボール部の会見には齋藤和也部長、野沢憲治監督と選手4人のほか、内定先のウルフドッグス名古屋の佐藤和哉部長、日本製鉄堺プレイヤーズの長谷川博之GM兼強化部長も同席していた。

司会を4年生の主務、園村英斗選手が務めていたことや、マネージャーに加え、ほかの4年生の選手たち、3年生のアナリストが会見を見守り、質疑応答でのマイクを受け渡し、公式インスタグラムのライブ配信の手伝いをして、バックアップしている姿が印象的だった。トップリーグに内定した選手もそうでない選手も、チームメイト同士が支え合う関係性が私には素敵に感じられた。

会見の結びにはイタリア・セリエAに現役選手を派遣するバレーボール部のプロジェクト「THE FUTURES」の説明もあり、舩本颯真選手(総合政策2)がシエナ(2部リーグ9位)、土井柊汰選手(文2)はサンドナ(3部リーグ1位)、坂本アンディ世風選手(総合政策1)がヴェローナと、3人の派遣先が発表された。

土井選手のポジション、リベロの海外派遣はほかのポジションに比べ、トップリーグの選手でも珍しいため、土井選手の挑戦がリベロのさらなる海外挑戦の後押しとなることを期待したい。

取材後記

文武両道を実践 競技への姿勢、考え方に尊敬の念

学生記者 小保方愛香(法3)

中央大学伝統の地である駿河台キャンパスで行われたハンドボール部、バレーボール部の合同記者会見。両部はともに創部80年を迎えようとする歴史を重ねてきた運動部だ。

運動部の練習場所といえば、現在は多摩キャンパスがすぐに思い浮かぶのだが、大学の本拠地が駿河台にあった頃、両部が創設されたという事実からも、長く受け継がれてきた伝統、歴史に感銘を受けた。また、文武両道を大切にしてきた大学であることも改めて知ることができた。

平日は基本、6時半から早朝練習をするというハンドボール部。練習後、1限の授業がある選手たちが十分間に合うようにという設定だという。実方智監督は、「基本は授業に出られるよう、練習時間を決めます。ハンドボールも頑張るし、学業も頑張るといのが中大ハンドボール部のモットー」と話した。

インカレ4連覇という輝かしい成績を残していることに注目が集まりがちだが、同時に学業もおろそかにすることなく、文武両道を実践する選手たちは学生の模範というべき存在であり、広く知ってもらいたいと強く感じた。

続くバレーボール部の会見にはSVリーグ入りする選手4人と、海外派遣される選手3人が臨んだ。バレーボール界は2024年、ネーションズリーグ、バリ五輪、そして新たなSVリーグの開幕など多くの人々を魅了し、人気が高まった。日本代表の石川祐希

選手(2018年法卒)をはじめとする中大卒業生の存在もその盛り上がりにも貢献しただろう。

選手たちは会見で、謙虚かつ誠実に受け答えをし、新たなステージに向けての強い決意、覚悟を十分に示した。どのような質問にも、自身のプレーに対する考えや指針、海外派遣された際の学び、チームメイトの存在の大きさなどを丁寧に説明していた。

現在、体育連盟の運動部に所属する私自身、選手たちの競技に対する姿勢や考え方に尊敬の念を抱き、大きな刺激を受けた。学生生活を通し、紆余曲折があった中で、競技に没頭し、継続してきたこと自体が称えられるべきだろう。

熾烈な^{しれつ}メンバー争いをくぐり抜け、試合に出場し、実力を発揮することは尋常ではない不断の練習の積み重ねと努力が必要だ。そして、選手たちが向かおうとしている未来は今以上に厳しい世界かもしれない。しかし、それを一番に理解しているのは彼ら選手たちで、数々の困難を乗り越えてきた経験と自信があるからこそ、気持ちを新たに前に進むことができるのだろう。

彼らを目標にする後輩たちも増えるはずだ。活躍が国内にとどまらず、国外にも広がり、ハンドボール、バレーボール界がますます発展するよう、心から応援したい。私自身も社会人の一人の記者として選手たち取材する日を迎えられるよう、残りの学生生活を充実したものとしていきたい。